

解説

森晋太郎



シリアの短編小説家
ジャミール・ハトマル
(Jamil Hatmal, 一九
五六―一九九四年)
はダマスカス生まれ。
父アルフレッド

(一九三四―一九九三年) は南部ハウラーン地方の町八バブ出身の著名な画家である。ハトマルは高校在学中から創作を始め、七〇年代前半には既に文学界の注目を浴びていた。一方、幼い頃に母親を亡くしたことで、心臓に疾患を抱えていたことは彼の生涯に影を落とした。

一九七〇年代末から八〇年代にかけてはシリアの政治情勢が厳しさを増した時代で、ハーフィズ・アサド体制がレバノン内戦に介入して「国民運動」やパレスチナ解放勢力と対立し、国内ではムスリム同胞団との衝突が激化するなか、左派や民族主義者に対する官憲の弾圧も強まった。ハトマルは反体制派の文学者たちとともに『文学ノート』と称する刊行物の発行に取

り組んだほか、共産主義行動連盟に加入して政治運動に積極的に関与し、八一年に逮捕されて数か月間収監された。投獄の前年には一子を儲けた妻と離別している。

獄中で健康状態が悪化したため釈放され、治療のため渡仏し、八五年には一時帰国したものの、その後は生涯フランスで暮らすことになる。シリア時代からの友人である芸術家ユースフ・アブデルキー(一九五一年―)と映画製作者ハローラ・アブドゥッラー(一九五六年―)などの知己にも恵まれ、執筆を続けたハトマルであったが、パリには馴染まず、望郷の念を抱きながら三八歳の若さで病没する。

ハトマルの生前に刊行された短編小説集は四冊で、『白い帽子の少女 (al-tifa dau al-qubba 'a al-bayda') (一九八一年)』と『動揺 (inf'at) (一九八五年)』にはシリア時代の作品が、『国のない時 (yina la bita) (一九九三年)』と『病気の話、狂気の話 (qisas al-murad qisas al-junn) (一九九四年)』にはフランス時代の作品が収められている。また、生前に未発表であった第五作品集『僕は彼らに言う (sa' aqil lahum)』を含めた全集『ジャミール・ハトマル五大短編集』が一九九八年に出版された。

全集に序文を寄せた小説家アブドゥッラフマーン・ムニーフは、ハトマルの作品に通底する要素として「悲しみ」を挙げている。明快な

表現と洗練された技巧で日常の何気ない出来事
を描写する作品はシリア人らしい機知やユーモ
アに富んでいるが、女性関係の挫折、病の苦し
み、政治的抑圧と獄中体験、そして望郷の念と
いったハトマル自身の経験を反映してやるせな
い悲しみが常につきまとう。そのことを指して
ムニーフは「最初の短編から最後の短編まで一
つの長編小説的な視点を我々に提示し、短編小
説にむしる自伝小説に近いような役割を担わせ
ている」と評している。

今回訳出した三編はいずれも第三作品集『国
のない時』所収である。「公園のベンチに座っ
ている男」では、異国暮らしの男が犬になりた
いと夢想する様子が描かれる。欧州に亡命した
作者自身を彷彿とさせる主人公は自由の身では
あるかも知れないが、祖国を遠く離れて、会話
や挨拶を交わす相手もろくにいなくて、公園で
飼い主に可愛がられる犬たちを羨ましく眺めて
いる姿は、何とも言えない孤独と寂寥を覚えさ
せる。

「家族の匂い」で描かれる獄中の経験は、「監
獄文学」なるジャンルの存在が指摘されるアラ
ブ諸国とりわけシリアの文学では馴染みの題材
と言えるだろう。「鶏を四角形にすること」も
また、祖国での政治的抑圧が背景になっ
ている。題名の意味は作品を読めばすぐに分かるが、
この短編には更に「ジャブラーとマギー社と秘

密け……に」という謎めいた献辞が付されている。ハトマルの作品にはしばしば家族や友人への献辞が記されているのだが、この作品の献辞は特に風変わりな目を引くので、ちょっと補足をおきたい。

先ず二番目の「マギー社」については言うまでもあるまい。ただ実際には固形スूपの素で有名なマギーのブランドは、一九四七年に現在のネスレ社に統合されているようだが、それはあまり気にしないことにしよう。

次に三番目の「秘密け……」は、原文のアラビア語では「アルムムハー……」(al-mukha……)となっている。シリアの事情を知る者ならば、これが「アルムムハーバラー」(al-mukhabarāt)と呼ばれる秘密警察を指しているだろうことは即座に思い浮かぶところだ。市民の監視や密告、不当な逮捕や投獄、拷問を常套手段とし、独裁体制による抑圧の代名詞として恐れられてきた治安機関である。作品に出てくる「第二の友人」はおそらくその監視の対象になっていて、家宅搜索の際に発見された冗談交じりの書き置きが何かの符牒だと疑われて追及の対象になってしまふという、不条理かつ現実であり得そうな展開を見せるわけだが、さてその秘密警察が献辞の対象になっているのはどういうわけなのか、「秘密け……」と後半が省かれているのは、この名称を最後まで明記することを憚ったという

ことなのか、忌み嫌ったということなのか、そのへんは正直言つてよく分からない。

そして最初の「ジャブラー」であるが、これはジャブラー・イル・ガルビーというハトマルの親友の愛称だと思われる。彼はハトマルのダマスカス時代、旧市街のバープ・トゥーマ地区に住んでいた医学生で、他の仲間たちと共に集い、酒を飲み、芸術を語り、恋に落ち、革命を夢見る日々を過ごしていたことや、ジャブラーが秘密警察に逮捕され、数か月後の誕生日に恩赦でひよっこり帰ってきた日の逸話などが、別の友人の回想に記されている。訳者は初めてこの「鶏を四角形にすること」という短編を読んだとき、祖国の不条理な現実をブラックユーモアを交えて描いた作品だと理解したし、それはそれで正しいのだろうけれども、「ジャブラー」が誰なのかを知った今では、実はこの作品には「ジャブラーがいたあの頃」への何がしかの郷愁といったものも込められているように思えてならない。

ムニーフは前述の序文の中でハトマルの個性的であることを指摘しつつ、「彼は同世代の数少ない者たちの典型でもある。それは大きな夢と、さらに大きな挫折の世代である」と評している。

先に言及したアブデルキーヤアブドゥッラーのほかにも、ハトマルの同世代の友人には短編

小説家イブラヒム・サミュエル(一九五一年ー)、散文詩人リヤード・サーレフ・フサイン(一九五四年ー一九八二年)などの文学者や芸術家たちがいる。その多くは一九六七年以降の時代に変革を夢見て表現活動や政治運動に参加し、独裁体制の苛烈な弾圧に直面して傷ついた人々である。愛する祖国を追われ、祖国を思いながら異郷に客死したハトマルの姿は、同世代の典型であつたと同時に、二十有余年の時を経て今現在に繋がるシリア人の経験を物語っている。



ジャミール・ハトマル
『国の無い時』(1993)